

「出会い 末盛千枝子先生 その1」

今日の東京は曇り空です。東京タワーの上は雲が厚いのですが、下の方は明るく感じます。

晴れた日はもちろん好きなのですが、曇り空も深みがあって嫌いではないです。雲の向こうのさきに光の届く場所がある、オランダの画家、レンブラントの絵を思い出します。

末盛先生との出会いは2016年8月20日、新聞でのインタビュー記事を拝見した時です。

「悲しい物語でも最後に希望がある。生きていていいと」

「想像力で気づく 形は変わっても宝ものはそこに」

という見出しに心惹かれました。末盛千枝子先生は絵本の編集者で世界的に活躍されていると知りました。インタビューでは絵本の魅力を次のように語っておられます。

「魅力的な絵と研ぎ澄まされた文章が相まって、分かりやすい表現が追及されています。

心を打つ絵本は、どんなに悲しいおはなしでも最後には希望が見えます。これは国境を越えた共通点です。」

この語りに、研ぎ澄まされた感覚を持って看護師はケアに当たるといふ、ベナーの言葉を思い出しました。看護師は病む人々の傍らにあって、その人がその人らしく生きていけるように、希望を見失わない…。インタビューを読み進むと次の言葉に出会いました。

「希望をテーマに手がけた『そらに』(95年)は少女が持っていた風船を話してしまうところから始まります。

風船が消えて悲しみ色だった空は、やがて夕焼けで美しく染まる。でも、空は暗くなって、またがっかりする。

けれど、今度は一番星と三日月があらわれる。宝ものは、形を変えながら、じつはずっと空にあった。」

慢性病を病む人々は喪失体験を繰り返す。たとえば、右手の機能を失うことはつらいことだけれども、失ってばかりではなく、失うことによって、得ることや見えてくることもある。

私たち看護師は、喪失体験をその人にとって、意味ある大事な体験となるように支援している。

そして、大切なものはずっとそこにある。見えていなかっただけ…

